# マルクス主義経済哲学の成立の必然性

梯　明　秀

一、三つの源泉的思想の止揚における三つの論理的契機
二、マルクス主義的思惟の概念的な自己展開としての歴史的現実の発展過程
三、『資本論』における三つの契機の相互関連と、その学的体系性
四、社会主義的契機に滲透した経済学的契機と哲学的契機との相互媒介

## 一、三つの源泉的思想の止揚における三つの論理的契機

マルクス主義経済学が本質的に経済哲学であるべきであるということは、マルクス自身の経済学の成立過程をかえりみるとき、たれしも異議を唱えることは不可能であろうと、思われる。

周知のレーニンの言葉によれば、マルクス（Karl Marx. 1818-83.）は、「人類が一九世紀に、ドイツの哲学、イギリスの経済学、フランスの社会主義として創造した最良のものの、正当なる継承者である」わけであり、そして、このレーニンの言葉が、政治的実践においても学問的労作においても、マルクスに終生協力し、ともに同一の立場を築き上げるための労苦をいとわなかったエンゲルス（Friedrich Engels, 1820-95.）自身の、若き時代の実践と理論とにおける出発点についても、同じく当てはまることは、いうまでもない。要するに、マルクスおよ

びエンゲルスにおいて創造されたマルクス主義には、三つの思想的源泉があり、これらの三つの思想的な流れは、それぞれ相互に独立に成立し発展してきたのであったが、ひとたび彼らの若き頭脳に流れこんで綜合されたときに、弁証法的に統一されたというわけである。そして、この思想的継承関係において、かれらの若き頭脳のなかに流れこんだ三つの思潮にあって、綜合さるべき直接の諸要素となったものは、カントにはじまるドイツ観念論の完成者としてのヘーゲル哲学と、近代ヨーロッパに成立し発展してきた経験科学としての経済学のブルジョア的な理論体系を、全面的に展開したスミス（Adam Smith, 1723-90.）、リカルド（David Ricardo, 1772-1823.）の古典経済学と、資本制社会そのものが産業革命とフランス革命とを展開した歴史的発展の段階において、いまだ賃労働者が階級的な自覚のもとに資本家階級に対立して組織的な運動を展開するにいたらない以前に、資本制的生産様式に批判の眼を向けたところの、フランスのサン・シモン（Henri Cloude de Saint Simon, 1760-1825.）、フーリェ（Francois Marrie Charles Fouries, 1772-1837.）の空想的社会主義、ないしイギリスのオーエン（Robert Owen, 1771-1858.）の空想的共産主義とであった。これらのことも周知の事柄である。しかも、これら三つの源泉的諸思想を批判的に継承するための研究過程は、マルクスにおいてもエンゲルスにおいても、事実としては、時期的にみても、また、それぞれの時期における主体的努力の焦点からみても、さいしょは部分的に別々に行われた三つの過程であって、これら三つの研究過程が同一時期に全体として相互に関連せしめられて、弁証法的に止揚されるということは、マルクス主義の成立そのものの実現であるから、この実現までの綜合統一の過程が、その一つの部分的関連から他の部分的関連へと順次に遂行されるほかなかったということについても、だれでも研究者としての経験から容易に理解できるはずの事柄であろう。

それにしても、マルクス、エンゲルスの研究目的としては、それぞれの研究過程における主観的意図をつらぬく原理的なものとしては、マルクス主義を成立せしめうるための、三つの思想的源泉を、それらの同時的な相互関連のもとに全体的に綜合統一しうべき新たな一つの立場を彼らが最初から直観していたと、われわれは論理的に考えうるものとしなければならないであろう。いいかえれば、三つの源泉的諸思想は、すでに彼らの直観しており、そこから独自の構想を新たに展開しうるための未規定の思想内容を、構成すべき三つの不可欠の諸要素、すなわち諸契機であったと、論理的には考えねばならいというのである。このような未展開な構想力としての直観内容を、その規定され展開された姿において述べるとすれば、つぎのごとくなるであろう。

すなわちマルクス主義は、スミス、リカルドの古典経済学から、その経験科学としての方法とその理論内容とを、単純に批判的に継承しただけのものではなく、この批判的継承のためには、ヘーゲル哲学における弁証法的な思弁的思惟様式が、同時に媒介的な契機になっていなければならなかったはずである。このことは逆に、ヘーゲル哲学の体系および方法が唯物論的に止揚されうべきために、古典経済学の研究対象としたところの、近代に成立し発展してきた資本制社会の歴史的現実と、その研究成果としてのこの資本制社会についての本質的な構造把握による法則的知識とが、不可欠の媒体ないし媒介になっていなければならなかった、ということを同時に、いみするであろう。これらの二つの止揚の過程は、マルクスにおいてもエンゲルスにおいても、それぞれ別々に遂行されえたものではなくて、むしろ同一の止揚の過程における経済学的な面と哲学的な面との区別であったと、われわれは考えるべきであろう。たとえば、若かりし彼らがヘーゲル（Georg Wilhelm Friedrich Hegel, 1770–1831.）の観念論的な弁証法を、自然の領域に適用することによって唯物論化することができ、そして、その後に、この

弁証法的唯物論を社会の領域に適用するところに、史的唯物論が成立し、したがって近代資本制社会の科学的把握が可能となり、そのかぎりにおいて、古典経済学における科学性のブルジョア的な限界を批判することができた、というふうには、われわれとしては、理解すべきでないであろう。ソビエトの諸種の教程なり、日本の客観主義的偏向にある唯物論者たちの諸労作のうちに、いまだ跡をたたないところの、このような理解の仕方は、二つの源泉的思想からの批判的継承による創造的止揚の過程という一つの歴史的事実にたいして、この事実そのものが構成されている諸要素にまで分析して、それらの内面的な相互関係において綜合し、そして、この事実の全体的内容をば、生きた動的な姿で思惟的に再構成する、という概念的把握の方法論的態度をとるのでなくて、それらの諸要素の現象形態を機械的に分離したのちに外から結合するという、それ自体で非弁証法的な、悟性主義的な理解の仕方である。古典経済学の科学性のブルジョア的限界は、唯物論的弁証法の成立をまって、はじめて批判されえたのではなくして、ヘーゲル哲学の神学的な、したがって反動的な体系を成立せしめた観念論的弁証法と、この古典経済学の科学性との綜合統一によって、後者のブルジョア的限界と前者の観念論的な限界との二つが、同時に廃棄されたのであり、いいかえれば、このような両者の差別性の奥に思弁的に認識された両者間の自己否定的な同一性においてこそ、あらたに唯物論的弁証法なるものが、はじめて創造されえたというふうに、われわれは考えなければならない。そしてまた、それと同時に、資本制社会の経済的構造についても、古典経済学におけるのと質的に異って弁証法的に把握されえたものとして、考えなければならないのである。

ところで、マルクス主義には、三つの思想的源泉があるものとしては、空想的社会主義もまた、右の一個の同一の止揚過程のうちに、いま一つ他の区別された契機として、はいっていたと考えなければならない。いいかえ

れば、資本制社会の経済的構造にたいするブルジョア的限界を超えることのできた対象認識についての弁証法的進展の過程にあって、マルクスおよびエンゲルスは、同時に、この第三の止揚を、すなわち、一般的に資本制社会に固有の経済的構造を、その生産様式において批判し、否定的に改造し、変革しようとする社会主義者ないし共産主義者としての実践的立場にたつばあいの、その思想的表現としての理論をば、同時に、空想的なものから科学的なものに転化することを、成就していたと考えねばならないのである。要するに、三つの源泉的諸思想は、さいしょは、それぞれ差別され相互に無関心な関係にあったものとして、それらの綜合統一としての同一の止揚の過程にあっては、相互に区別されうる三つの契機の相互関連にあり、すなわち、同一性における区別の関係に転化している、と考えなければならないのである。そして、この一個同一の止揚の過程が、マルクスおよびエンゲルスにおけるマルクス主義の成立過程でなければならない。かれらによる三つの源泉的諸思想にたいする止揚の過程が、たとえ、それぞれ別々に遂行されたかのごとき現象を呈するとしても、この現象的事実の内面にある論理的事柄としては、三つの止揚過程は、一個同一の止揚過程における区別された三つの契機、ないしは、それぞれの面として、理解されなければならないのである。

ところで、マルクスおよびエンゲルスの若き頭脳のなかに流れこんだ三つの源泉的諸思想が、このような論理的な事柄 Sache すなわち概念的事実 Tatsache の直観において、止揚され、この原理的直観の内容規定として、マルクス主義の経済学が、その対象的実在性の面において成立したものとすれば、その主体的な概念的思惟の面において、弁証法的唯物論の哲学が同時に成立しており、そして、資本制社会の経済学的な研究および叙述の方法論として、その対象的実在性の契機に緊密に結びついていなければならなかったわけである。そして、こ

の両契機の関連的統一において、資本制社会そのものの自己否定的な自己矛盾に拠るところの段階的発展が、対象的な歴史的現実として把握されていたのであるが、このばあいの資本制社会の経済学的把握が、そのまま、それの唯物弁証法的な把握であるということは、自明の事柄であろう。とすれば、そのかぎりで、また、マルクス主義における経済学の成立は、そのまま経済哲学の成立であるほかなかったということも、ここで、はじめて、一般的にではあるが、容易に理解されえたということになる。

マルクス主義経済学のその成立が、そのままに、その経済哲学の成立であることを主張するためには、以上のような論理的な事柄を指摘するだけでは、いまだ不十分であろう。というのは、マルクス主義そのものの成立のためのその第三の契機のことについては、すなわち、対象的実在としての資本制社会を、その経済的な自己矛盾において把握するという主体的立場そのもののことについては、いまだ述べられていないからである。ところで、この主体的立場が、まさに、一般的にいって社会主義ないし共産主義なのであるから、段階的に発展する資本制的現実の客観的に過程的な全内容を、否定的に受けとめる各段階ごとの場所的契機に、科学的な社会主義、すなわち共産主義が成立していると、考えなければならないからには、いましがた述べておいたところの、マルクス主義の成立過程における論理的事柄の原理的直観ということこそは、社会主義をその空想性から科学性に転化せしめえた第三の契機であったと、また同時に、われわれは考えなければならないということになろう。しかも、科学的社会主義ないし共産主義が、もともと実践的なものであるかぎりのものとしては、この場所的な原理的直観のことを、実践的直観とよぶことができるし、また、歴史的現実のうちに直接的に、したがって感性的に把握されたところの、この本質的原理は、実践においては当為となって、われわれに対象的に迫ってくるものとしては、

この場所的直観のことを、当為的直観ともよぶことができるであろう。そして、この当為的な場所的直観によって、マルクス主義は、資本制社会の歴史的現実の全内容を、その発展の各段階ごとに全面的に受けとめ、如何に実践すべきかの原理を、このように主体即客体の論理構造にある歴史的現実の対象面において認識せられる経済的矛盾のうちに、求める主体性にあるものとしては、この場所的な実践的直観は、さらにまた、マルクス主義的な世界観であるとせねばならないのである。

すべて、対象認識のための方法論は、その地盤に、それ固有の世界観をもっているのであるが、マルクス主義もまた、このことの例外でありえずして、それ固有の世界観の地盤のうえに、それ固有の経済学を対象認識として成立せしめ、しかも、この固有の世界観が自己否定的な当為的受容性にあるかぎりで、その固有の経済学もまた、対象的な資本制社会を自己矛盾的な運動の過程にあるものとして、認識することができるというわけである。ところで、さきに、このようなマルクス主義の経済学における認識方法が、この経済学を成立せしめる哲学的なものであり、そのかぎりで、マルクス主義経済学がそのままマルクス主義経済哲学であったということを、述べておいたのであるが、この方法論としての唯物弁証法が、いまやここに、唯物論的な世界観、すなわち唯物史観を地盤として成立することを知ったいじようは、この経済哲学は、たんにマルクス主義経済学の方法論だけを問題にするものではなく、さらに、この方法論の根底にあり、その発生の地盤であるところの世界観を、同時に問題にしなければならないことになっていると、われわれは考えるべきであろう。

## 二、マルクス主義的思惟の概念的な自己展開としての歴史的現実の発展過程

このようにマルクス主義経済哲学は、変革さるべき資本制社会にたいする経済学的認識のための主体的な方法論だけに、その学問的領域を限定すべきではなく、同時に、より徹底的には、この資本制社会変革のための主体的原動力としての唯物論的世界観を、したがって唯物史観をも、自らの学問領域と考えねばならないのであるが、このような考え方においてマルクス主義経済哲学を主張し発展せしめることは、マルクス主義学界ないし論壇になお多くみられる客観主義的立場をして、その偏向を反省せしめ正統的立場にたちもどらしめる意味を、もつものといわねばならないであろう。たとえば、マルクス主義の成立過程を論述するばあいであるが、客観主義的には、古典経済学と空想的社会主義との関連について、そのイデオロギー的な面だけでなく、これを制約する社会的背景をも問題にするにしても、それは、マルクス主義が成立するための外面的な対象的諸条件にとどまっており、その内面的な主体的契機を洞察することを疎かにしているものというほかはない。この主体的契機とは、右の社会的背景として実在している対象的諸条件を、綜合統一して現実的に動かしているところの、その時代の歴史的発展の論理そのものであり、その時代の歴史的生命としての理性的な概念内容たるものであって、しかも、この歴史的生命の論理こそは、それが弁証法そのものをいみするかぎりで、マルクスおよびエンゲルスが、ヘーゲル哲学から継承して、唯物論的に発展せしめた源泉的思想であったはずである。

マルクス主義の立場では、この弁証法的な歴史的発展の論理は、ふつうに史的唯物論とよばれているが、しかし、主体的な唯物史観があっての史的唯物論であることを、忘るべきでないであろう。とはいっても、このことは、唯物史観が場所的なものであるにたいして、史的唯物論は、単純に過程的なものであると主張することを、いみするのではない。およそ人類の歴史的発展なるものは、その段階段階において、場所的に過去の歴史的全内

容が否定的に受けとめられて、次の新たな段階が始まっているのであるから、史的唯物論そのものも、過程即場所的に、客体即主体的に展開され論述されねばならないのである。ヘーゲルにおいては、歴史的発展の論理は、観念的な理念の自己運動として展開されているが、この理念ということは、主観的概念が自己自身にたいして、必然的に自らに固有の客観的実在性を賦与するほかないという方法論的要請であったわけで、理念ということをもって直ちに観念論として斥けることは、ヘーゲル的源泉からのマルクスの批判的な継承関係そのものを、本質的に理解していないことを、自白しているものというほかはない。したがって、われわれに必要なことは、この観念論的なヘーゲル的理念が、マルクスないしエンゲルスによって如何に唯物論化されてきたか、ということを理解することにあるのである。すなわち、レーニンは、この観念論的な理念にたいして、哲学的に概念された物質を対置したが、その自己運動の方法については、ヘーゲルの弁証法を斥けることはしていない。そのかぎりで、全自然の歴史的発展の論理が、そこから演繹的に展開されうるわけであるが、*もともと、この自然史の理念は、マルクス、エンゲルスが史的唯物論を展開するための、前提になっている思想*であったはずである。

* このいみにおける全自然史的思想の展開の可能性については、わたしとしては、『物質の哲学的概念』『社会の起源』において追求しておいた。そして、この思想的前提において史的唯物論が成立しうべきであるとする立場で、つぎの『資本論の弁証法的根拠』所収の一連の諸労作を執筆しておいたのであるが、これらのことについては、『資本論への私の歩み』の第二部Aの項を参照されたし。

要するに、ヘーゲル的理念の主体的契機としての概念的思惟の自己展開なるものは、たんに対象認識における主観的な思惟についての事柄ではなくて、対象的実在そのものが規定的に自己の全内容を自己展開してゆく過程をいみするのであるから、唯物論の立場にあっては、当然ながら批判的に継承されねばならなかった論理であっ

たわけであって、ただ、ヘーゲルにあって、対象的実在というばあいには、その感性的契機を消去しており、しかも、その非感性的な実在的内容の自己展開というばあいに、その内容を段階段階において質的に自己を否定せしむる場所的契機を欠如していることを、批判したのであったと、われわれは考えなければならぬ。

したがって、いまここに、マルクス主義の成立過程という一つの歴史的事実を問題にしているばあいにも、三つの源泉からの批判的継承というイデオロギー的な系譜的関連を、ただ、その外面的な制約面としての社会的諸条件を叙述するだけにとどめて、そして、すましうるものではないのであって、この歴史的事実そのものの感性的にして概念的な内容の過程即場所的な自己発展の論理が、そこに洞察されねばならぬということが、とくに注意されねばならないのである。そして、社会の外面に現象しているだけの歴史的過程のうちに、その内面的な本質的生命としての論理的事実 Tatsache の主体的な自己運動を見るといういみで、三つの思想的源泉からのそれぞれの止揚の過程は、一個同一の止揚の過程を構成する三つの区別された諸契機であると、さきに述べておいたわけであった。したがって、また、このような論理的事実そのものの主体的契機として、概念的思惟の自己展開ということが、ここでとくに注意されなければならぬところに、右の批判的継承関係におけるヘーゲル哲学の役割の重視と、われわれのこの問題を解明するときにおける哲学面の重視とが、われわれによって、あえて強調されねばならぬ理由があるのである。とはいっても、この哲学面の解明において、われわれが、ただ、ヘーゲルの概念的思惟の自己展開ということにたよるかぎりでは、右の論理的事実をたんに過程的に見て、その場所的契機を見のがしてしまい、したがって、ヘーゲル論理の裏がえしにすぎないことになり、そのかぎりで、マルクス的な概念的思惟の自己展開を理解しえないことについては、これまた、いましがた述べておいたとおりである。

さて、このような過程即場所としてのマルクス主義的な概念的思惟を、内面的契機としてもつ外面的な諸事件の相互関連の総体の過程が、現実社会の歴史的発展であり、そして、一九世紀前半におけるこの現実社会の歴史的発展をつらぬく内面の魂ともいうべき論理的事実としての、歴史的生命の自己展開の過程そのものが、マルクス主義の理論および実践の発展過程である、というように理解してきたかぎりでは、マルクスおよびエンゲルスの如何なる労作、如何なる活動においても、弁証法的に止揚されたかぎりの三つの源泉的思想が、その三つの契機として存在していると、われわれは同時に考えなければならない。すなわち、いまかりに、たんに実践的にとどまるかにみえる何らかの一つの活動を例にとるにしても、それは、その科学的社会主義の思想に緊密に結びついたところの、経済学的理論と弁証法的思惟とを前提とし、また原理としているわけであり、また、唯物弁証法的に思惟された客観的な経済学的理論にとどまるかにみえるものも、たんなる理論でなくして、それ自体で実践的意味をもつ理論でなければならないのである。そして、このように、個々の労作ないし活動が、このような論理構造にあって、その三つの契機のうちのいずれかの一つないし二つの面において、表現されているのが、現象的事実であるというわけであるが、これらの三つの契機が同時に綜合され、したがって、それらの相互関連における統一を原理とする全運動が、理論面において、この原理を場所的に直観されうるという実践的直観の立場で把握されているかぎりでは、この直観の全内容からの規定的に展開されたものが、マルクス主義的な叙述となる。しかも、この叙述は、このようなマルクス主義的な概念的思惟の自己展開によるものとしては、ヘーゲル哲学におけると同じく、体系的にならざるをえないわけである。そして、マルクス主義におけるこのような体系的労作が『資本論』であり、マルクスおよびエンゲルスのこのようなマルクス主義的概念的思惟の自己展開が、『資本

論」において完結したと考えることに、たれしも異議をさしはさむことはないであろう。さらにまた、同様のことが、実践面においても、見られねばならないわけであるが、このような理論面と実践面との区別における同一性こそが、マルクス主義なるものの論理学的な内容となっているのである。

このことを、くりかえして述べるならば、実践面から区別された理論面においても、逆に、理論面から区別された実践面においても、経験的に客観的対象を観察し、悟性的にその本質的原理を分析してゆく、という実証的な科学性の契機と、この本質的原理を場所的に直観することにおいて、自由に概念的思惟を展開してゆく、という理性的な主体性の契機とが、それぞれ同一性における区別された両面として見られねばならないのであるが、このことは逆に、実践面における主体的活動方法としての戦術、戦略が、対象的実在としての資本制社会についての科学的分析において展開された、その段階段階の特殊の構造に対応していなければならぬことを、いみするであろう。これらの論理的構造は、マルクスおよびエンゲルスの一つ一つの労作ないし活動を、吟味して見ることによって、おのずから明らかになる事柄である。ただ、このばあいに、悟性的に分析された対象的にして感性的な実在についての本質的な規定が、如何にして、主体的な直観内容としての自己展開的な原理になりうるか、という認識論的問題にたいする解決こそは、まさに、マルクス主義をマルクス主義たらしめており、また、たらしめるための哲学的な面であって、ここにこそ、実践的直観の立場なるものを、したがってまた、この立場におけるマルクス主義経済哲学を、わたしが、あえて学界に提唱する所以があるわけである。しかも、この実践的直観の立場において当為的に要請されているものが、科学的社会主義であるかぎりで、マルクス主義的思想の論理構造において、なお区別される哲学的な面と社会主義の面との同一性を、ここに見ることができる、ということ

についても、問題のないところであろう。すなわち、マルクスおよびエンゲルスが、協力して樹立することを計画し、しかも、それに成功したところの、唯一の科学的理論なるものは、要するに、如何にして資本制的な権力機構を打倒して、プロレタリアートの独裁を獲得し、共産主義社会を建設しうるか、という実践的要請にこたえうるための新たなる学問的体系であったわけである。

ところで、この新たに創造された体系的学問が『資本論』(Das Kapital, 1867.)であることは、いうまでもないが、いまだ体系として完結するにいたらなくても、その理論内容が、右のプロレタリアートの実践的要請にたいして十分にこたえた労作ないし活動として、われわれは、四八年の『共産党宣言』(Manifest der Kommunistischen Partei.)を挙げることができるし、さらに遡って、四三—四年頃のマルクス、エンゲルスの諸労作ないし諸活動においても、三つの源泉的諸思想は、すでに綜合統一されていたと、考えねばならない。いいかえれば、マルクスの四三年の『ヘーゲル法哲学批判』(Zur Kritik der Hegelschen Rechtsphilosophie, Einleitung.)ならびに四四年の『経済学および哲学に関する手稿』(Ökonomische-Philosophische Manuskript.)と、エンゲルスの四三—四年の『経済学批判大綱』(Umrisse zu einer Kritik d. Nationalökonomie.)ならびに『イギリスにおける労働者の状態』(Die Lage der arbeitenden Klassen in England, 1845.)の未定稿とにおいて、さらに、これらの諸労作の発表機関であったし、また、ありえたところの『独仏年誌』(Deutsch franzosische Jahrbücher.)を発行した前後における彼ら両人の協力活動と政治的実践とにおいて、マルクス主義は、すでに成立していたと、考えねばならないのである。くりかえして述べることになるが、マルクス主義の理論および実践を構成する三つの契機は、それらの緊密な相互関連を、その複雑化された具体性と正確性とにおいて『資本論』が体系化されており、その体系化

以前のすでに正確にして緊密な相互関連が『共産党宣言』であり、したがって、この『宣言』までにいたるマルクス、エンゲルスの諸労作は、この相互関連を一歩一歩と正確化し緊密化していった足跡であると考えられ、そのかぎりで、四三―四年頃のマルクス主義の成立当初においては、この緊密にして正確な相互関連がいまだ抽象的単純性にあるか、ないしは、この正確な相互関連の緊密さが部分的に不十分であるかの、いずれかの未成熟、未展開のものもあるはずである。それにしても、これらの諸労作は、過程即場所的なマルクス主義的思惟が概念的に自己運動しはじめた出発点であるものとしては、さらにまた、この出発点以前においても、彼らは、それぞれ別別に、三つの源泉的諸思想を綜合統一するためのマルクス主義的原理は、彼らのそれぞれ固有の立場において、実践的に直観されていたし、直観されつつあった、と考えることも論理的にゆるされうるであろう。

このようにして、初期マルクス主義ということは、一九世紀の前半において激動していったヨーロッパ社会の現実の歴史的過程にあって、各国に生起した政治、経済的な諸事件を、弁証法的唯物論の立場で綜合統一してゆくべき原理――すなわち、この歴史的過程そのものの論理的な魂、あるいは、この過程を現実のものたらしめている内面的な歴史的生命――を、マルクスおよびエンゲルスが実践的に直観した時点から出発し、四三―四年頃には、未規定な直観内容のうちから、彼らのそれぞれの構想力によって統一原理を規定的に自己展開せしめていったところの、彼らの労作過程のことをいみするのである。そして、この過程において同時に、三つの思想的源泉が弁証法的に止揚されてゆくのであるからして、初期マルクス主義の思想の発展段階を、われわれが理解するためには、すくなくとも、一九世紀前半の歴史的現実の外面に現象した諸事件を、その背景に表象しておくというだけではなく、この外面の諸事件と内面の歴史的生命との論理的な相互関連――すなわち、外面から制約され

ている関係と内面からの規定している関係との相互関連――を、思弁的に分析し、かつ吟味してゆくという方法を、すなわち、歴史的現実の概念的把握の方法を、われわれは、とらねばならないのである。しかしながら、このような初期マルクス主義の研究は、マルクス主義の成立のための論理的関連の解明から出発してゆくべきものとして、いうまでもないことであるが、四三―四年頃までにおいて、三つの思想的源泉が、マルクスおよびエンゲルスの若き頭脳のなかに流入してゆくための実在的可能性――いいかえれば、そのための客観的な、ならびに主体的な諸条件の総体――についての実証的であると同時に思弁的な分析的研究を、その解明のための前提としなければならない。そして、このことを、ここでとくに指摘しておくことを必要とするのは、彼らのもっとも初期の諸労作のなかのいずれにおいて、マルクス主義が成立するにいたったかを、判断するための規準が、この前提的研究のうちにおいて、同時に解明されるはずであるからである。

## 三、『資本論』における三つの契機の相互関連とその学的体系性

マルクス主義の三つの源泉的な諸思想が、その成立期に如何に止揚されて、その思想内容の三つの契機に転化されて如何に統一されているか、ということを、さきに挙げた成立期の諸労作において、詳細は吟味するということは、いまのばあい、他の機会にゆずらねばならない。だが、それにしても、ここで、とくに問題にしておきたいことは、マルクス主義の思想を構成する三つの契機としての、科学的であるという面と、哲学的であるという面と、それから共産主義的であるという面とが、弁証法的に統一されているということが、マルクスおよびエ

ンゲルス以外のすべての諸思想、すなわち諸理論ないし諸実践にたいして、マルクス主義的に正しいかどうかの一般的な規準になっているということについてである。

すなわち、マルクス主義的思想の成立後のマルクスおよびエンゲルスのすべての労作ないし活動が、この一般的規準にかなったものでことについては、まえに述べてきたように、それらが、マルクス主義的思惟の概念的な自己展開の運動の一歩一歩の足跡であることから、問題のないところである。とするならば、この自己展開する過程即場所的な概念的思惟の最後の成果として、学問的体系性にある『資本論』においても、いな『資本論』においてこそ、右の三つの契機ないし面が、弁証法的に統一されており、それらの弁証法的統一の典型がしめされているはずである。したがって、われわれが『資本論』においてマルクス主義的思想を理解しようとするばあいにも、これらの三つの面から、それぞれの契機を相互関連的に見ていかねばならないことになるであろう。これに反して、その一つ面からその契機だけを抽象して、これを他の二契機から切りはなし、ただ、この契機だけを研究するということは、論理的には、ゆるされないことであり、また不可能なことなのである。なぜなら、三つの契機の統一としての全体がマルクス主義の思想内容であって、それらの統一における相互関連から、いずれかの一つないし二つの契機を機械的に切りはなしてしまえば、この相互関連としての全体的内容そのものが、すでに壊されたことになっており、したがって、マルクス主義的思想内容もまた、そこに無くなっている、ということになるからである。

たとえば、『資本論』の思想内容における科学性の契機は、経験科学としての経済学として、その叙述の表面に現われているが、この経済学が、社会主義的のものであり、その研究対象としての現実の資本制社会を、プロ

レタリアートの立場から否定的に見ることによって、その現象形態の背後にある本質の領域において、普遍的原理を帰納的に分析してゆくところに、成立した経済学であることには、たれも異議をさしはさまないはずである。そして、この経済学の理論的叙述が、弁証法的に展開されているということ、くわしくは、経験科学的分析によって抽象されたもっとも普遍的な原理であるところの商品を端緒として、この端緒的商品としての範疇そのもののもつ矛盾の自己展開によって、ぜんじ自らの範疇規定を複雑にしてゆき、さいごに、現実の資本制社会そのものの具体的な全構造を、われわれの頭脳のなかに再構成する、という弁証法的な思惟様式によって展開されているということ、このことについても、問題はない。要するに、『資本論』の経済学としての科学性の契機には、すでに、社会主義的な契機も、哲学としての契機も、ともに含まれているわけである。これと同じように、マルクスが『資本論』を書いた立場としての、あるいは、賃労働者が現実の資本制社会を否定し、これを変革しようとする立場としての、プロレタリアートの世界観という面において、『資本論』の思想内容における社会主義の契機が現出しているのであるが、この社会主義的世界観にも、他の二つの契機としての科学的であることと哲学的であることとが、滲透して相互関連的でなければならい。また『資本論』の思想内容における哲学的契機の直接的表現であるところの、その叙述の方法としての弁証法にも、同じように、社会主義的世界観の契機と経験科学としての経済学の契機とが、相互関連的に統一されて一つの全体を構成していなければならぬのである。

要するに、三つの契機のいずれであっても、それが現出しているそれぞれの面には、他の二つの契機が弁証法的に統一されていて、そこに構成された全体としての思想内容がマルクス主義的であることを、うしなっていない。このように、諸契機が一つの全体を構成しているばあいに、それらのそれぞれの契機においても、それぞれ

同一の全体が同時に構成されているということ、このことが、弁証法的統一ということの論理構造なのである。したがって、『資本論』をいずれの面から問題にするにしても、弁証法的統一ということのなにものであるかという、この大切な一点を、われわれが忘れさえしなければ、われわれとしては、たれでも、そこにマルクス主義の思想内容を具体的に理解しうるし、また、しえなければならないという論理構造になっているのである。このことを逆にいえば、われわれが『資本論』を経済学として読み、そして学び、さらに、そこに展開されている諸範疇、概念諸規定、諸法則によって、現実社会の諸現象を理解し、新たに発生した諸事実を解明するばあいに、ただ経験科学的にのみ、われわれの脳随を働かせるだけで、いいかえれば、われわれの思惟を悟性的にのみ――そこに内在している全体の一面のみに固執し、この面を全体から切りはなし、これを固定化する作用においてのみ――働かせるだけで、十分であると考えているとすれば、『資本論』そのものは弁証法的であっても、その『資本論』研究は、弁証法的でなく、したがってマルクス主義的なものでなくなる。いわゆる公式主義な、あるいは客観主義的な偏向が、この誤謬の姿である。わたしが、『資本論』をたんに経済学としてのみ見るべきでないと、つねに主張しているのは、ただ、このことを、いみしているにすぎなかったのである。『資本論』を、ただ、このように悟性主義的にのみ研究するにとどまるかぎりでは、それを同時に論理学としても読むということに、無関心でありうるほかなく、そのかぎりで、『資本論』の哲学的契機を、その経済学の面から排除してしまうということにもなるのである。

このような誤謬に、『資本論』を研究する経済学者だけが、おちいりがちであると、わたしは、ここで、言おうとしているのではない。それは、社会主義者としての実践家も、それを論理学として読もうとする哲学者もま

た、おちいりがちな論理的な誤謬なのである。じっさいには、『資本論』の哲学面を、非哲学的にしか思惟していない哲学者もありうるし、また、はなはだしきは、それを哲学的に正しく自由に思惟している思想家にたいして、ただレッテルを貼りつけることをもって、マルクス主義的批判であるかに安易に考えている実践家もでる可能性にあるのである。それほどに、弁証法的に統一するということは、困難なことなのである。この弁証法的統一ということを、ただお題目のように覚えるだけのことならば、きわめて容易なとなのであるが、自分の頭脳の働き方の自己訓練によってはじめて、われわれも、かろうじて誤りなきをうるといういみで、事実的に困難なことなのである。これらの極端な事例をもふくめて、要するに、『資本論』を研究するばあいに、われわれのおちいるいっさいの誤謬は、われわれ思惟様式が、たんに悟性的にとどまっていて、いまだ真に弁証法的にわれわれ自身の頭脳を働かす主体的な実力になっていないということに、もとづいているのである。

そこで自分が、このような誤謬におちいっているか否かを、判断するためには、『資本論』を読み、また研究するばあいの自分の思惟様式が、たんに悟性的なものにとどまっているか否かを、自分の内に反省してみるほかはない。そして、悟性的なるものを、部分的にしか、固定的にしか、形式的にしか働かしえない自分の頭脳を、全面的にも、流動的にも、内容的にも働くような頭脳までに転化することができたときには、すでに理性的な思惟様式のできる実力をもつものにまで、自分の頭脳を鍛えあげているわけである。この理性的に思惟するということは、このように外と内とを統一して物ごとを見てゆくことである。『資本論』も経済学としては、われわれの外に実在する資本制社会の経済的構造を、経験科学的に分析してゆくものとしては、われわれの思惟作用は、どこまでも悟性的あることに徹底する一面を、もっていなければならないのである。それにしても、この研究過

程は、徹頭底尾、悟性的であってもよいということには、ならないのであって、悟性的に定立された諸規定、諸概念、諸法則のそれぞれの固定性、一面性を流動化し、相互に関連せしめ、それらを、全体的内容のなかに規定的に位置づけるという思弁的な思惟作用を、すなわち、悟性的機能を弁証法的に止揚した理性的機能において作用する思惟様式を、われわれは、われわれの研究過程において働かせていなければならないのである。それであればこそ、マルクス自身の研究過程の最終の成果としての叙述は、このような思惟様式の表現として、たんに悟性的なものでなくて、思弁的契機をふくんだ理性的なもの、すなわち弁証法的ものになっているのである。しかも、ここにおいてこそ、その叙述の方法論が、たんに悟性的であることに徹底しようとした古典経済学のそれと、質的に異っている理由を、われわれは見なければならないのである。

したがって、『資本論』の叙述の方法論を理解するためには、まず、われわれ研究者が、自分の思惟様式をつねに反省して、これを自分の意識のうちに対象化して、分析してみなければならない、ということになる。このように自分の思惟様式そのものを、自分自身の思惟の対象として、いいかえれば、この観念的な対象を、その生きた姿において分析することを、あたかも、いましがた指摘したように、思弁的な思惟作用というのであるが、この自己反省における思弁的分析そのものが、われわれの思惟能力を鍛え高めるための唯一の生きた方法であると同時に、この方法がまた、そのまま、対象認識における方法論の主体的契機をなしているのである。そして、マルクスもまた、彼自身のこの主体的な生きた方法で資本制社会の経済的構造を研究したのであるはずであるから、われわれとしても、それぞれ自分自身の生きたこの主体的な方法によってのみ、『資本論』の叙述の方法を、生きたものとして、すなわち、自分のものとして、主体的に把握することができるというわけである。

ところで、『資本論』の方法論は、たんにその叙述の方法論だけのものでない。この叙述の方法論は、悟性的であると同時に理性的でもあり、科学的であると同時に哲学的でもあるがゆえに、すなわち、ヘーゲルよりも具体的な弁証法的な思惟様式であるがゆえに、ヘーゲル哲学におけると同じように体系的なもの、しかも、より現実的に体系的なものでなければならない。まずヘーゲルと同じように体系的なるものとしては、『資本論』の叙述もまた、その端緒から出発すれば、かならずこの端緒に帰ってくるような円環運動*を描いて、どこまでも前進してゆく思惟様式によってつらぬかれているはずであろう。しかしながら、マルクスによるその叙述の方法は、ヘーゲルのそれと異って、哲学的であると同時に科学的でもあるものとして、叙述の方法だけで円環を描くのではなくて、マルクス自身が『経済学批判』の「序説」で述べているように、マルクス主義経済学の方法は、この叙述の過程とそれ以前の彼の科学的な研究過程との、いいかえれば、いわゆる上向的な復帰の過程と下向的な前進の過程との、くわしくは、上向的な綜合的演繹の過程と下向的な分析的帰納の過程との統一であるべきものとしては、この統一が、そのまま円環運動になっているような体系*でなければならない。とするならば、マルクスが、この下向的研究のための現実的出発点とよんだところの、われわれの社会的環境として対象的に実在している資本制社会にたいする感性的直観、ないし、その混沌たる全体表象が、『資本論』の学的体系性における方法論的な出発点としての端緒でなければならない、ということになってくる。ところで、このような感性的直観なり、その直観内容としての対象についての全体的な表象なるものは、そのままでは、ただちに端緒ということは論理的に不可能である。だからマルクスも、それを明確に、しかも正当にも、現実的出発点とよんで、端緒とは規定しなかったのである。すなわち、このような現実的出発点は、実在的対象の現象であり、ばあいによっては、

その仮象にすぎないものでさえありうるし、上向的叙述の出発点としての商品のように、実在的対象の本質としての原理ではなく、そこから出発して必ずそこへ帰ってくるという円環を描きうるような、必然性のないところの出発点であるにすぎない。それは、社会的環境のなかにある研究者が、たまたま経験した経済的諸事実、諸現象のいづれからでも出発してもよいという、たんに偶然的な出発点であるにすぎないのである。

それにもかかわらず、『資本論』の学的体系性なるものが、ヘーゲル哲学のそれと異って、悟性的科学を思弁的哲学の下位に従属せしむることをせずに、経験的にして悟性的な科学と単に思弁的ならざる理性的な哲学とを対等の地位においたうえで、両者を弁証法的に統一するところに、成立すると考えるべきものとしては、それが、さきに述べたところの、研究過程と叙述過程との統一としての円環運動のほかに成立のしようがないとすれば、この現実的出発点が、けっして偶然的なものでなくして、下向的研究の前進の過程において、つねに必然的にそこに復帰してくるような原理的なものを、潜在せしめていなければならない、ということになってくるであろう。すなわち、現実的な出発点は、そのまま現実的な端緒になっていなければならない、*ということになろう。しかしながら、このようなことが、現実的出発点の対象の側においては、いま述べたように論理的に不可能であるとすれば、つぎに、われわれとしては、このことを、研究者の側において、認識主体の側において、考えてみるほかに方法はないわけである。

* 「資本論」を、その学的体系性において理解してみようとする戦後におけるわたしの努力の成果は、主として、『ヘーゲル哲学と資本論』のなかに収録されてある。そして、未完の「資本論体系の図式的解明」は、わたしのこの意図を明瞭にするための労作である。ただ、この労作においては、この体系の主体的契機、すなわち現実的端緒の問題にまで、その論述は到達していない。この点の要約的な論述については、「資本論への私の歩み」の第三部Ⅳを参照されたし。

ところで、『資本論』は、マルクスの言葉にまつまでもなく、賃労働者の立場において、賃労働者の階級的自覚をうながすために、書かれたものであった。そこで、現実的出発点に、われわれ研究者でなくて、賃労働者を仮りに認識主体として置いて見る。そうすると、この賃労働者は、『資本論』を読み、そして十分に理解することによって、階級的自覚を得るということが、そこに考えられる。階級的に無自覚的であった賃労働者が、このように自覚的になりうるように、マルクスが『資本論』を書いたということについて、すなわち、その上向的叙述が、そのような結果を労働者たちに期待したものとして展開されていることについて、だれも疑うものは、おそらくないであろう。とすると、『資本論』の読者ないし研究者として資本制社会の経済的な構造の何であるかを知ろうとした賃労働者は、最初の無自覚的な自己から出発して、そして、この最初の自己へ自覚的になって帰るというわけである。ここに、一つの論理的な円環運動が考えられたことにはならないであろうか。たしかに、ってくそのように考えうるし、考えねばならないかぎりで、われわれ研究者も、この賃労働者の立場にたって、彼の体験したとおりに、現実の資本制社会を、その感性的に直観した全体表象から出発して、範疇としての商品にまで科学的分析を徹底さすならば、その上向的な叙述の方法どおりに、資本制社会の経済的構造を論理的に理解することができ、それと同時に、われわれ研究者もまた、賃労働者階級の立場を自覚することができる、というわけであろう。すくなくとも、マルクス自身は、このような円環運動をする思惟様式において、資本制社会の経済的構造を研究し、そして叙述したことに、相違はない。なぜならば、このことこそが、彼が賃労働者の立場において、賃労働者のために、『資本論』を書いたということの、唯一の意味であったからである。

* この現実的出発点を端緒たらしむるための賃労働者の問題については、既刊の『資本論の弁証法的根拠』所収の「人間

労働の資本主義的自己疎外」以来、わたしの念頭にあったわけであるが、これが『資本論』の学的体系性の問題に結びついて、その主体的契機として明確に意識されるにいたったのは、戦後のことである。前掲『ヘーゲル哲学と資本論』の第四章「歴史的現実と経済学の方法」が、その理論的表現である。しかし、賃労働者が如何なる論理的意味において『資本論』の学的体系の端緒になりうるかの詳細な分析は、「マルクス主義経済哲学」として展開してあり、また、そのための論理的前提として、賃労働者の論理構造を解明する必要があり、この意図のもとに執筆しておいた一連の諸労作が、「賃労働者の向自有的論理構造」、「四四年《手稿》におけるマルクスの哲学思想」、および「賃労働者の範疇的把握」である。

## 四、社会主義的契機における経済学的契機と哲学的契機の相互滲透

『資本論』の学的体系性が、前節で述べてきたように、その現実的出発点をば、同時に、論理的な端緒であるとするところの、方法論的な操作によって、はじめて、その可能性が考えられうるものとしても、なお、そこに、つぎのような三つの問題があり、しかも、これらは、いずれも、右の方法論的操作と同時に、理解されていなければならない問題なのである。

まず第一の問題は、現実的出発点から出発した下向的な研究過程と、理論的端緒としての範疇的商品から出発する上向的な叙述過程とは、相互に質的に異った思惟様式であってよいかどうかという問題である。下向的な研究過程の思惟様式が、近代に成立した経済学以来のそれと、したがって一般的に、近代的学問として発生した経験主義的自然科学のそれと、まったく同じように、たんに悟性の立場のものであるにたいして、上向的な叙述過程の思惟様式は、マルクス自身が、「批判」の「序説」において明言しているように、ヘーゲルの自己展開する概

念的思惟を批判的に継承しているところの、すくなくと理性的な立場のものでなければならないのである。とするならば、賃労働者の立場にたったマルクスという同一の人間の思惟が、現実的出発点を論理的端緒として、そこから出発して範疇としての商品にまで前進し、そして、この商品を理論的端緒として、そこから帰路について、もとの現実的出発点に復帰する、という円環運動を描くというのに、これらの往路と帰路との、下向過程と上向過程との思惟様式が、それぞれ質的に異っているのでは、同一の人間の同一の思惟様式では、論理的に不可能な事柄であるとせねばならないであろう。すくなくとも、われわれの思惟が、学的体系性にあるものとして、円環運動をなしうるためには、ヘーゲルのそれのごとく、概念的に自己運動するものであり、したがって、この学的体系性を成立せしむるところの、円環的な自己運動にあるマルクス自身の思惟も、また概念的思惟でなければならぬ。この概念的思惟が、ヘーゲルにおいては、観念的な理念の自己運動として、たんに思惟的にして、たんに過程的なものにとどまっていたのにたいして、マルクスにおいては、感性的にして同時に思惟的であり、場所的にして同時に過程的である、ということについては、第二節において述べておいたとおりである。そのかぎりにおいては、「資本論」の学的体系性を成立せしむる円環的な思惟の自己運動も、そのような一個同一の思惟様式のものでなければならぬというように、われわれとしては考えうるわけである。

すなわち、まず、感性的実在のうちに帰納的に分析してゆくところの、下向的な思惟様式は、悟性的でなければならないが、いま仮りに、それをたんに悟性的なものにとどまらず、同時に理性的なものでもあるとするならば、感性的実在の内容の自己展開としての概念的運動が可能であるものとして、感性即理性的な思惟様式となりうるであろう。このことは、下向的研究過程が、たんに悟性的にのみ、対象的実在のうちにおける因果関係だけ

をたどってゆくものでなくて、実在のこの因果的な関連のうちにおいて、同時に目的論的に、商品にまで下向してゆくものと考えるべきことを、いみしている。事実は、そのとおりであって、商品にまで到達すれば、それ以上の下向的分析を、たんに悟性的に前進せしめていないのである。すなわち、商品なる規定を抽象することができて、これを範疇として定立することができたかぎりにおいては、『資本論』における悟性的な下向的分析の過程は、その目的を達したのである。このことは、現実的出発点において、マルクスが、すでに、この商品なる範疇を目的概念として観念的に表象していたことを、あるいは、現実的出発点そのものにおいて、目的概念としてのこの範疇的商品が潜在していたことを、いみしなければならないであろう。つぎに、この下向的研究過程とは反対に、上向的な叙述過程における思惟様式もまた、たんに理性的な概念的思惟の自己展開にあるだけのものでなくして、それは、同時にこの自己展開の各段階ごとにおいて、感性的な実在の因果的関連において帰納的に分析しえた概念規定と、前段階の範疇から演繹された概念規定との、思弁的綜合における弁証法的統一によって新たなる範疇を定立しているのであり、このことの繰りかえしによって、より単純なる範疇から、より複雑なる範疇へと、上向していっていることについては、『資本論』の叙述そのものが明示しているとおりである。その叙述は、むしろ悟性的分析の姿を表面に現象せしめていて、それをつらぬいている理性的な、したがって弁証法的な思惟様式を見うしなう研究者さえいるほどである。このようにして、下向的研究過程も上向的叙述過程も、ともに悟性的思惟と理性的思惟との統一であって、同一の概念的な思惟様式であることを、ここに理解することができるわけである。いいかえれば、下向的過程のみが悟性的なるがゆえに科学的であり、上向的過程のみが理性的なるがゆえに哲学的である、というべきではなくて、両過程とも本質的には、同時に科学的にして哲学的なの

であるが、ただ、その現象形態を異にしているだけのことにすぎぬものとせねばならないのである。

つぎに第二の問題は、第一の問題の解明として今しがた、その下向的研究過程について述べたことに関連するのであるが、それは、現実的出発点においてマルクスが、さいしょから範疇的商品を目的概念として表象していた、ということについてである。このことが、いかなる論理的必然性にあるのであるか、という問題である。いいかえれば、すでに現実的出発点において範疇的商品が目的概念として潜在していたとすることは、いかにして論理的に可能であるか、という問題である。ところで、この問題の解明については、われわれとしては、さしあたり、つぎのことを想いおこす必要があるであろう。それは、マルクスが現実的出発点を端緒として考えたということは、たんに研究者として、そのように考えたのではなくて、賃労働者の立場にたった研究者として、そのように考えざるをえない必然性にあったということである。逆に言いなおすならば、この現実的出発点に置かれた賃労働者は、――そして彼は、現実の労働市場において、つねにそうなのであるが、――『資本論』を読むかぎりにおいては、研究者の意識をもっているはずであり、そして、その研究者としての意識において、自己の無自覚的状態から出発して、円環運動を描いたのちに、自覚的な自己に復帰するのでなければならなかったということである。とするならば、われわれとしては、ここで、この賃労働者が如何なる論理構造にあるものとして実存しているか、ということを、つぎいて考えればよいであろう。

さて、現実の賃労働者は、いうまでもなく労働市場において資本家にたいして、自己の労働力を売り、その代価として労賃を受けとり、これによって、自分および自分の家族の生活をささえている。すなわち賃労働者は、資本制社会において人間として実在しうるためには、商品的実在性に甘んじなければならぬ。ところで現実の事実

として、労働力が商品であるかぎりでは、他の物としての商品とまったく同じく、価値法則によって、価格の変動によって、その日常の物質的生活が根底からゆすぶられている。この現実の事実は、つぎのように論理的表現されることができる。すなわち、労働者は、もともと人間として人格でありながら、この人格は商品として物化されている。すなわち、彼は資本制的な労働市場において自己の本来の姿を喪失して、自己疎外におちいっている。そして、このように自己疎外におちいっているかぎりでは、この疎外の状態において、喪失している自己自身を、自己の本来的な姿を、とりもどさなければならぬ。ところで、自己疎外の状態からの自己回復というこの論理は、現実には、資本制社会における彼の商品的実在性を否定すること、すなわち、資本家に彼の労働力を売ることを否定すること、したがって、労賃を受けとることを拒否すること、資本制社会で実際的に生活ができなくなること、をいみする。しかしながら賃労働者は、じっさいに生活しているかぎりでは、労賃を得るために資本家に彼の労働力を売っているのである。要するに、一個の人格者としての賃労働者は、資本制社会において人間として実在するためには、自己を商品的実在に疎外せねばならず、この自己疎外から本来の人間性を、人格たることを、回復しようとすれば、この商品的実在性を否定せねばならない。このことは、一つの解決不可能な循環論であるが、賃労働者にとっては、ぜひ解決せねばならぬところの自己矛盾である。このことは、賃労働者は、つねに現実の労働市場にあって、この自己矛盾を自らの論理構造としてもっていることを、いみするのである。この現実的な事実から、その解決のために出発しないかぎりでは、彼は、その循環論のままに、つねに不安定であり、動揺し苦悩しているほかはないわけである。

そこで、この苦悩のすえにおいて賃労働者としては、自分は人間でありながら、たぜに、資本制社会において

は、商品でしかありえないのであるか、という問題を提起せざるをえないはずである。このことは、彼が自らの自己矛盾の体験を自覚することにおいて、自ら自身によって解決しようとする立場に、この自己解決のための出発点に、現実に立ったことをいみするであろう。そして、このような理論的な問題提起は、まさに彼が研究者として、彼の現実的出発点に立たされたときのことでなければならぬ。このばあい、彼は、彼に直接的な商品的実在性を、いいかえれば、彼の感性的直観内容たる商品性を、すなわち物として疎外されたる自己の状態を、自己自身から、自己の人間性から分轄 Urteilen して、すなわち悟性的に判断 Urteilen して、対象的に定立することになるであろう。これが、『資本論』における下向的研究過程を成立せしむるところの論理的根拠であって、そのかぎりで、対象的実在の因果関連のうちから商品としての単純なる規定を抽象するとされているところのこの研究過程において、目的論が最初から本質的なものとして貫いていなければならないということは、いうまでもないことであろう。そして、この研究過程は、すでに目的として定立された商品にまで下向的に分析するならば、この目的の実現として、それ以上に下向する必要はないのである。すなわち、ここにわれわれとしては、さきに述べたところの、現実的出発点において範疇的商品が目的概念としてすでに潜在していたということの、論理的可能性をみることができたというわけである。要するに、賃労働者の自己矛盾的論理構造そのものが、このことのための実在的可能性にあったというわけである。

ところで、つぎに賃労働者は、彼の自己矛盾そのものの自己展開として、まずさいしょに自己分割するわけであるが、この自己分割としての自己自身の判断において、区別されるにいたったところの、対象的に実在する物としての商品と、人間性ないし人格としての自己自身とを、客体と主体とを、主語と述語とを、繋辞によって同

一性におく。この繋辞による結合は、現実的出発点としての感性的直観と抽象的範疇としての商品の悟性的規定とを統一するものとして、理性的な作用でなければならぬ。そして、これが『資本論』における上向的な叙述過程を成立せしめている論理的根拠であるわけである。そして賃労働者は、この上向的叙述をたどることによって、すでに、理性的立場にあって、資本制的生産様式の特殊性を概念的に把握することになったはずである。すなわち、現実的出発点においては、彼の体験していた自己矛盾は、この上向的復帰においては、資本家と賃労働者との階級的矛盾として客観化され、プロレタリアートとして資本制社会を止揚すべきであることを、自覚するにいたったのである。ここに、賃労働者の自己矛盾の論理構造は、その現実的出発点からの円環的思惟の運動を媒介することによって、対象的な資本制社会そのものの階級的矛盾を場所的に受けとめうる立場に、自らの論理構造を現実的に具体化することができたというわけである。いいかえれば、賃労働者自身も、その自己矛盾の自己解決を、このようにして遂行しえたというわけである。そして、このことこそが、『批判』「序説」においてマルクスが、直観的表象を概念にまで加工するといったことの、真実の意味であったのである。しかも、いまだなおリカルドの影響下にあった四〇年代の若きマルクスおよびエンゲルスが、労働力の商品化におけるリカルド的な客観主義的法則にあきたらず、主体的に、資本制的生産様式を特徴づけるところのものとして洞察した「恐るべき現実」なるもの、すなわち、この人間の商品化というブルジョア的事実は、このようなものとして論理的に解明され、それが『資本論』の学的体系性を成立せしめているところの、論理的にも「恐るべき現実」であることを、われわれとしても、いまここに、知ることができたというわけである。

そこで、さいごに第三の問題にうつらねばならないのであるが、それは、『資本論』の方法論的体系が、こい

ような賃労働者の自己矛盾的な体験において成立しているものであるとすれば、資本制社会の経済的環境のうちにおいて生活する、すべての賃労働者の感性的直観の内容なるものは、これを、認識論的にいかに基礎づけることができるであろうか、という問題である。ここで、われわれの主張しておくべきことは、この賃労働者の自己矛盾的な感性的直観なるものが、カントの認識論的に分析した感性的直観の内容のように、ただ雑多なる素材だけのたんなる所与性でなくして、そこに、形式を、本質的規定を潜在せしめていて、しかも、この潜在的な規定がカントの構想力のごとく、その直観内容の混沌とした雑多な表象を統一しつつ、さらになお、ヘーゲルの概念的思惟のごとく、自己の規定を自己展開できるがごときものでなければならない、ということである。いいかえれば、マルクスの感性的直観なるものは、実在的対象の現象面に直接しているだけのものでなくて、その本質的構造を理解しうるための未規定な原理を内在せしめており、この原理が、それ固有の構想力によって、対象的実在主観的概念とを綜合統一しつつ、自らを規定し、さらに、この単純なる規定を、ぜんじ復雑なものにしてゆくという自己展開的な自己運動をするごときものでなければならないであろう。そのようなものとして、賃労働者の、したがってマルクスの現実的出発点なるものは、資本制社会の感性的直観であることに相違はないが、しかしその直観内容は、たんなる受動的な所与性にとどまるものではなくて、同時に、その経済的構造の特殊性を具体的に規定しうる必然性にある抽象的原理をば、すでに当為として受容している直観としては、それは、資本制社会を一つの世界として構成しうる直観としての世界観である、ということができるであろう。しかも、賃労働者の資本制社会にたいするこの世界観が、その肯定でなくして否定でしかありえないかぎりでは、それは、たんに資本制的に特殊な経済構造の本質的矛盾を理論的に理解することを、保証しているだけのものでなくして、その本

質的矛盾の自覚においては、その経済的構造そのものを変革するほかないところの実践的衝動を、さいしょから自らのうちに潜在せしめているがごとき感性的直観でなければならないのである。したがって、それと同時に、この感性的直観の能動性としての構想力なるものも、たんに悟性の規則としての図式によって感性の雑多性を綜合統一してゆくだけのものではなくて、この図式を媒介にして、対象的に実在する自己矛盾をば、場所的に自らの直観内容とし、この自己矛盾の主体的自己展開において、悟性的法則を感性の雑多のうちにあって組み替えうる、したがって所与的な対象自体を否定的に変革しうるところの、創造的な意志能力であるとしなければならないのである。

以上の三つの問題に解明によって、現実的出発点が現実的端緒であるべきである、とすることの論証を、われわれとしては、ここに成就しえたものと信じてよいであろう。そして同時に、われわれは、『資本論』の思想内容としての哲学的契機を、前節の最初にあっては、その経済学的契機において、その方法論として問題にしてきたのであったが、いまや、ここに、この経済学の方法論の根底にあり、この方法論を出発せしめる世界観にまで、この哲学的契機を深化せしめてきたわけである。しかも、賃労働者のこの世界観において成立する『資本論』の方法論が、経済学の体系を成立せしむるところの、たんに理論的なものにとどまらず、同時に実践的な方法論として、戦術、戦略でもあるのであるから、このように経済学的方法論としての哲学的契機を、プロレタリアートの世界観にも徹底せしめて、『資本論』の思想内容のいま一つの契機としての社会主義的な契機に、一致せしむるにいたったことを、われわれは、ここに知ったわけである。マルクスが四三年の『ヘーゲル法哲学批判』において、つぎのごとく述べているのは、まさに『資本論』の社会主義的面における、その経済学的契機と哲学的契

機との相互関連的なこの統一においてでなければならない。

――「哲学がプロレタリアートのなかに、その物質的武器をみいだすのと同じく、プロレタリアートは哲学のなかに、彼の精神的武器をみいだす。そして、思想の稲妻が、この素朴な民衆のなかに底ひろく伝播するや否や、ドイツ人の人間への解放は、成就されるであろう。この解放の頭脳は哲学であり、その心臓はプロレタリアートである。」――

前節の最初に、『資本論』は単なる科学としての経済学でないといっておいたのは、このような意味の哲学でも、同時に、それがあることを主張するためのものであったのである。すなわち、『資本論』の思想内容の経済学的契機のみでは、その社会主義的契機までには、このように滲透することはできないのである。しかしながら、また同じように、その哲学的契機のみでも、また不可能である。経済学的契機は哲学的契機を媒介してのみ、また同じように、哲学的契機は経済学的契機を媒介してのみ、その社会主義的契機に滲透することができるのである。ここに相互媒介している経済学的契機と哲学的契機の統一が、経済哲学であることを、われわれは、ここに十分に確認しておくべきであろう。要するに、マルクス主義経済哲学なるものは、本篇の最初に述べておいたところであったが、古典経済学とヘーゲル哲学との相互媒介的な止揚の面だけに成立するものでなくて、そこに同時に止揚されていたはずの、もはや空想的ならざる科学的な社会主義の面を、場所として、この場所における経済学的契機と哲学的契機との相互媒介的な統一において、はじめて成立しうるものとして、われわれは、認識しておかねばならないのである。